



理系あるある

小谷太郎 著

幻冬舎新書 780円+税 195頁

読み物
お薦め度
4
☆☆☆☆★

世の中の人々は「文系」と呼ばれる「普通の」人々と「理系」と呼ばれる人々に分類され、後者はときに変人扱いになるらしい。幸か不幸か幼少時から「理系」人間に取り囲まれて育ってしまった私は、思い返せば確かに変人扱いされることも多かった。本書は、「理系」人間には自分がなぜ「理系」に分類されるのか気づかせ、「理系」人間以外の人々には「理系」人間の頭の中を理解してもらうことを目的の一つにしている。

並べられた「理系あるある」は、「チェック着用率が高い」「黒茶赤橙黄緑青紫灰白と呪文を唱える」といった「なんぼなんでも都市伝説やろ」というものから、「地震が起きると震源までの距離を計算してしまう」「「ぜひ新しい星を見つけてよ」と言われる」といった「た、確かに…」とってしまうもの、さらに、「1,000 mgの表示に「1gだろ」と突っ込む」「標本の少ないアンケート結果を冷笑する」といった、「え、そこみんなは違うの!？」というものまで、計63項目。私は39項目に当てはまった。「理系」と呼ばれる現象が珍しい現象ならば、ポアソン統計に従うはずなので、1シグマはルート（平均値）。私の結果は「理系」と言われる人々の平均から何シグマの範囲なのだろうか。筆者にぜひ聞いてみたい。ちなみに「理系・研究者は変人だ」と信じてやまない母は、ほとんど当てはまらなかったらしい。やはり検定能力があるのか。今や「理系」の主体ともいえる生物科学系・医学系の人にも挑戦してほしいなあと考えたが、残念ながら身近にチャレンジしてくれ

る人がいなかった。残念。

それぞれの「あるある」について、「理系」ではない人にわかりやすく状況がコミカルに描写される。その後、なぜそのような状況に陥るのか、どこに普通の人々と「理系」人間のかい離があるのか、理系的知識を交えながら説明されている。これが実は、基礎数学や基礎物理学、統計学、工学などの1トピックについての、非常にわかりやすい解説になっている。「一体理系人間って何よ」と思って読み始めた人が、気がつくど、なぜ「理系」人間が「理系」な行動をとるのか、理解できるのだ。また、「理系」に分類されることを不名誉だと感じている人は、なぜ普通の人々が自分の考えを理解できないのか、見えてくるかもしれない。普通の人々と「理系」な人々をつなぐ一冊である。

また、最後に出てくる「リケジョあるある」は、最近のリケジョブームや女性の活躍促進をうたう政府にぜひ読んでほしい。どうやったら女子学生たちがより「理系な生き方」を選びやすくなるのか、まさしく本書のとおりだと思った。その意味で、理系世界（あるいは社会全体？）の男性と女性をつなぐ一冊なのかもしれない。

「あるある」で「理系」の世界をまとめたのは非常に面白いアイデアである。ただ、本当に「理系」な世界に興味がない人（つまり、最もこの本を紹介したい人）には手に取ってもらえないかも、ということで星を一つ減らした。

馬場 彩（青山学院大学）